

松倉とし子新聞 23号

発行(株)十一屋内 とし子の会事務局

〒990-2338 山形市蔵王松ヶ丘2-2-24

TEL 023-689-0011 fax 689-0012

満員にお客自身が感動、そのことに私も感動！ ～とし子さんの東京コンサート、裏方からの報告～

報告・中尾庸蔵（東京とし子の会）

4月13日、東京の渋谷で、とし子さんの

コンサート終了後、来てくれた友人、知人が、口々に「満員だったね、おめでとう」などと言って、にこにこしている。会場の定員は345人だが、ほぼ満員、300人は入った、



玉田元康

鹿島武臣

松倉望

松倉とし子

吉田秀行

西脇久夫

「松倉とし子&ポニージャックス 春に寄せて しあわせのハーモニー」

2015・4・13 於：東京・渋谷 渋谷区総合文化センター大和田 伝承ホール

東京コンサートを3年ぶりに開催してから1か月余り。コンサートの裏方を務めた私はまだ、コンサートの「成功」の余韻に浸っている。昨日も、コンサートに来てくれた姪から言われた。「3年前のコンサート以上に素晴らしい内容で、ありがとうございます」。私が歌ったわけではないのに、ありがとう、なんて言われた！（とし子さんありがとう）。

そして、「雨なのに、お客様、たくさん来ましたね！」。うーん、やっぱりその話になるか。

と思う。コンサートのお客は、歌を聴きに来るのだが、いつの間にか興行師の気分にもなって、お客がたくさん来るとそのことにお客自身が感動するようだ。それに初めて気づき、私も感動した。

東京コンサートの感想としては以上に尽きるが、これでは短すぎる。通常は中々表に出てこない、コンサート当日の裏方の働きを報告し、報告の責めをふさぐことにしよう。

○午前9時 私と音響担当、ホール経由でお願いしたピアノの調律師(～11時)が相次で会場に着く。まず、照明を手伝ってくれるホール職員と打ち合わせ。この日は別の仕事で来れない山形総合舞台サービスの松本亘氏が事前に何度も電話で打ち合わせをしてきていて、スムーズに話が進む。松倉人脈は、プロがボランティアになって働くので、スゴイ。

○正午 仕出し業者「金兵衛」が出演者用弁当を10人前運んできた。主なおかずは鱈の味噌漬け焼。3年前と同じ業者だが中々うまいと評判。弁当と前後してとし子さん、望君母子、ボージャックス4人、ピアノの森若さんから続々登場。リハーサル始まる。

00回のシャッターは切れない。



舞台から見ると、満員

○16時 NHKの後輩の元記者2人到着。コンサート中の受付の留守番、コンサ

お客続々、開場時刻30分早める コンサート開催問題、舞台上から決着



客席の後ろから見ても満員

○14時 山形のとし子の会会員ら7人到着。早速打ち合わせの上、出演者、スタッフの夕方の軽食用のサンドイッチ20人分とボトルのお茶の調達および配布を担当。

○15時 中尾とNHKで同じ職場の若い女性3人(遅れてもう一人)到着。受付の他、陰アナなども担当。3年前も同じメンバーが参加しており、客の捌きはベテランの風格。続いて、雇上げたプロの女性カメラマン到着。リハーサル、本番、打ち上げまで撮影。鋭いアングルで撮る、などの技術的問題より、素人には、およそ5時間で10

ート後の打ち上げ会場の整備の仕切り役で活躍。このころまでにNHKOBの豊島氏、興譲館OBの飯沼、神野氏など裏方幹事の顔が揃う。

○17時前 17時半開場、18時開演の約束だが、お客が続々と来て、ホールの広い前室がいっぱいになる。雨なのに足が良いな、と驚きながら、あわてて予定より30分早く客席に着

いてもらう。

○18時 いよいよ開演。私事になるが、これまで山形、東京、長野で5、6回とし子さんのコンサートの裏方を務めた。しかしいつも、遅れて来る客の相手をしたり、お金の整理が有ったり、コンサート自体はまともに見たことがなかった。今回は自分の年齢を考え、裏方が出来るのも今回限り、と思い、後輩を留守番役に呼んで、初めて客席で、コンサートを頭から終わりまで見た(聞いた)。

コンサートの内容の評価は私の任ではないが、とし子さんとボニージャックスは、個性が全く対照的で、しかし、強い親和性がある、見事な組み合わせである。会場全体があつと言う間に、このコンビが作り出す、懐かしい日本の歌の世界に引き込まれていった。

とし子さんがピアノを弾き、ボニージャックスが歌唱指導する「歌声茶論」のコーナーは予期以上の人気。お客様みんなが歌うのを楽しんだ。そしてプログラムに無い秘密兵器、とし子さんの愛息・望君が最後に登場して、とし子さんとデュエット。大うけだった。

○20時半 60人が参加して、ホールから2分のサブウェイ日本経済大学店で打ち上げ(～22時)。3000円会費で、サンドイッチ、チキン、スープ、ポテトフライ、カンビール小2個、ボトルのお茶。とし子さん、ボニーさん、東京、山形の客、集客に威力を発揮した興譲館OB、それぞれ感想を言い合い、和気あいあい。

次回コンサート、来年秋開催

さて、コンサートの今後だが、ことして終わり、という私の目論見は、コンサートの「成功」で見事に阻まれ、次は来年秋開催の方向で準備することになった。

コンサートのさ中、とし子さんが舞台の上から「雨の中沢山来てくださって、うれしい」と述べ、「こういう機会を持つことが出来たのは」と、私の名前を出した。あれあれ、と思っていると、「来年もお願いします、中尾さん」ときた。そこへ、照明が気を利かして(?)、私にスポットライトを当てた。気恥ずかしいやら、どんな顔をしていいやらわからず下を向いていたが、「語り」の名手・とし子さんにしてやられ、コンサートの来年開催問題は、ここで事実上決着、勝負あったのである(5・15記)。



ボニーさんと とし子さん

東京コンサートでは本当にお世話になりました。心から、ありがとうございます。3年半ぶりに伝承ホールで、幸せに歌わせていただくことが出来ました。

今回のプログラム、構成は、すべて私が、ボニーさんから任せていただき、作りました。オープニングの曲からフィナーレまで、「歌声茶論」のコーナーも含めて、西脇さんも玉田さんも鹿島さんも…みな「あなたがやってみたいように決めて良いよ」とおっしゃって下さいました(ボニーさん、改めて感謝します。ありがとう!)

みなさん 心から

ありがとうございます!

～とし子さんからの手紙～

コンサート後、お客さまの「楽しかった」というお声を頂戴できて、心から幸福でした。翌日の山形新聞に東京コンサートについての記事が掲載されました。私のアップの写真が使われていますが、私としては、満席になったホール全体、ステージ全体の写真を使ってほしかった、と少々残念です。

でも、山形の方々から、「新聞見ましたよ」と沢山お声をかけていただき、**あの幸せな、夢のようなステージは、夢ではなく、現実のものだった、と改めて思い返しています。**

コンサートに来ていただいたお客さま、支援して下さったみなさま、ほんとうにありがとうございます。

2015年4月15日 心から感謝をこめて 松倉とし子

インタビューシリーズ・とし子さんの愉快的な音楽仲間たち

⑤ボニージャックスのテナー・西脇久夫さん

「プロデューサー能力抜群のとし子さん

ボニーグループの営業部長に欲しい」



西脇久夫さん

ボニージャックスは、早稲田大学のグリークラブの男性4人が重唱団を結成(1958年)、歌い続けて来た(大町正人さんが病死、吉田秀行さんが後継)。西脇さんは、ボニーのトップテナーだが、株式会社「ニュー西北エンタープライズ」の社長として興行面を仕切り、ボニー全体を引っ張っている。—松倉さんはどんな歌手?

「プロデューサーとしてきわめて有能だね。交渉ごとに大変な力を発揮する。鹿島君と松倉さんのデュエットという興業スタイルがあるが、あれもかなり松倉さんが話を持って来る。山形でも、要所要所に話を付けて、色んな企画を実現する。ボニーグループの営業部長に迎えたいくらいだ」

—純粋な歌手としては?

「クラシックから抒情歌まで、なんでも歌える。クラシック出の人だが、マイクを上手に使えるようになり、声を張り上げずに、ソフトに歌える。歌うジャンルも抒情歌、日本歌曲中心で、ボニーと相性が良い、というか波長が合う」

—ボニーさんが女性と歌う中で、一番多いのが松倉さん?

「昔は倍賞千恵子さんや由紀さおりさんとも一緒に歌ったが、今は松倉さんが一番多いね」

—ボニーさんの今後の活動方針は?

「僕らは歌える歌が5000曲ある。注文があればなんでも歌う、いわば歌の伝道師だね。その中で松倉さんと一緒に組んで歌うのは、一つの大きな柱だね」

—松倉さんは、一緒に歌いやすいか?

「松倉さんの声には、妙な角がない。丸いと言ったらいいのかな、一緒に歌う人を活かす声です」松倉さんとボニーさんの組み合わせは、平成10年(1998年)のNHK山形放送局制作の「松倉とし子音楽ファンタジー」(衛星では「山形スプリングコンサート」として全国放送)から始まった。今後も全国を舞台にますます継続・発展していきそうだ。

(編集部から) ○2012・1・1付けの22号を最後に休刊を続けていた松倉とし子新聞が、突然復活、とし子の会の会員諸氏もびっくりされたことと思う○休刊が続いた理由は、編集担当の私(中尾)が他のボランティア活動などで忙しく、手が回らなかった、というに尽きる○新聞の突然の復活は、とし子さんとボニージャックス4氏との共演の東京コンサートが3年ぶりに開かれたことによる○コンサートは本誌「報告」の通り、松倉・

ボニーファンの予想以上の圧倒的な支持に迎えられ、我々・主催者側も感激した○その感激を何らかの形で記録しておく必要がある、と考えた○さて今後のとし子新聞だが、次はいつ出せるのか、はっきりお約束する自信がない○ただ、来年秋に、とし子さんとボニーさんの今回と同規模の東京コンサートを開くことにしたので、少なくともその前後には、新聞を発行することになると思う(庸)